

われこそは真の民主主義者なりと、自分の左人指し指をタポール（おの）で切断、まさに狂気の沙汰であった、千葉県出身者。朝から晩まで団結の歌、赤旗の歌と悲壮な叫び声を張り上げ、作業現場に向かう。

ライチハに移動し、過酷労働は薄れ、給与も改善された。今考えて見るに、食糧の不足、過酷労働、厳寒、民主運動のテロルによって多くの死者が出た。

シベリア抑留体験記

神奈川県 鈴木重雄

私は北支派遣軍より終戦直前、満州龍江省白城子飛行場付近の警備のため駐屯し、八月九日ソ連の対日宣戦布告で、空襲を受けました。

その直後、師団は前線縮小のため朝鮮南下の途中、新京駅構内で移動停止され、武装解除されたのです。第八労働大隊を建国大学で編成。

以後足かけ四年、チタ（チタ州）とウランウデ（ブ

リヤート共和国）の州境のハラグリーンというシベリア鉄道の小さな駅に下車、その後東京ダモイと称して、転々と移動しながら作業をしました。そして昭和二十三年六月、無事に帰国したものです。

昭和二十年

八月二十五日西へ行くか東へ行くか、汽車は一望千里の広野を走る。我々は一体どうなるのかという疑心暗鬼でいっぱいだった。

八月三十一日に国境守備隊の拠点、黒河に到着した。街は砲撃で惨たんたる廢墟と化しているではないか。黒竜江の対岸ソ連領ブラゴエシチェンスクを四十両連結の貨車が出発したのは、晩秋の寒い夜だった。この夜が明ければ私たちの運命が決定するのだ。

貨車は時折不気味な汽笛を鳴らしながら暗黒のシベリア平原を北へ北へと向かって走り続ける。車内は身動きも楽でないし、照明もなく、退屈した兵隊の吸うたばこの火だけが赤く光る。窓の外は星明りで、ほの明るく、北極星が際輝いて見える。

一行三千人の部隊がどこへ移動するか不安でいっぱい

いだった。

黒竜江を通過するまでに私たちは何度か南下して行く邦人の開拓団や一般地方人の列車とすれちがった。

元気に手を振り、声をかけてくれたが、彼らも旅路の疲れと、栄養失調でやせた上、青黒い顔が痛ましく、目立った。

「どこへ行くんだ。君たちは日本に帰るんだ」

と負けおしみに答えていたが、だれもどこへ連れて行かれるか知らなかった。

貨車の屋根で見張っているカンボーイ（監視兵）もまた機関手も知らない。しかし幾度か同じ答えをするうちに、次第に自分たちが言うて信じていることを信じるようになってしまった。

九月二十五日 シベリアを走る

果てしない無人の広野を、見なれない木製の貨車は西へ西へと走り、どこまで行っても平地だった。三十分か四十分くらいに時々小さな駅があり（もちろんプラットホームなどない）、付近には民家があり、人間が申しわけ程度に住んでいる。シベリアの第一印象は、

何と単調で、広大なところかということである。

九月三十日

列車は一路目的地に進む。もう皆は希望も無残にも打ち破られ、列車外の風景もすっかり雪国になって、小雪が横なぐりに猛烈に降っている。

作業は鉾山だとか、森林伐採だとか希望を失った日本人独特のデマが車中の話題をにぎわせている。駅を通過するとき、他の機関車が汽笛をピューピューと鳴らし私たちを送るように大きく寒空に響く。

十月一日 到着第一日

下車後直ちに糧秣おろし。その後構内で宿泊準備、夕食を終わり寒さに震えながら死んだように寝る。

翌朝一個分隊ごとに輜重車に装具を積み込み、山の収容所に向かう。

十月二日

約三里の道を十二時間、すなわち最後尾は夜中の二時ごろ到着した。その夜は積雪三十センチもある雪中でたき火して宿営する。

十一月十六日 宿舍建設

到着後休養する間もなく、宿舎建設である。用材の伐採、運搬、地掘り等々、千五百人の人員がアリのように働く。特にこの宿舎は半地下式なので、地掘りは十月中旬だというのに一メートルくらいから岩石と永久凍土にはばまれ、作業の進行が遅れた。

私たちの宿舎建設はドイツ人用のもので、作業終了後、帰国できるというデマが乱れ飛ぶ。夜間作業も全員で地掘りをさせられたが、大豆粉のどろどろしたスープを飯盒のふた一杯だけ、ときたま明太魚の乾物が主食のときもあった。

十二月三十日

宿舎建設（一般四棟、管理一棟）は終わって天幕より移った。宿舎は間口八メートル、奥行約五十メートル、深さ地表より約三メートル、左右に三段の蚕棚、床板なしで細丸太敷

昭和二十一年一月十日

入ソ以来風呂に一回も入らない。体を拭く程度であるが、零下二十度にも下がっては拭けず、黒いあかがボロボロと出る。作業は一層厳しくなる。川が氷結し

て水が少ない（河底はわずかに流れていて全部が氷結しない）。死んだような疲労感。シラミがわく、栄養を吸い取られる、栄養失調、死亡するという順序である。朝七時、まだ薄暗いのに屋外に整列し、私たちは監視兵の来るのを待つ。やがて一個小隊の兵隊が門に到着した。私たちは通訳の指示どおり順次連れられてゆく。

収容所を出る前に人員点検するが、四列縦隊では計算ができないので、五列でなければいけなかった。

一人が隊列を見、一人が数えるということで、兵隊でも将校にしても簡単な計算が弱いので驚くほかはない。

私たち二百人の作業員は二人引き鋸（全長一メートル、刃幅十八センチ、厚み二センチくらい）おの（全長六十センチ、刃幅十五センチくらい）各一丁ずつ携行して伐採現場に行く。

行進中、監視兵は前後左右に各一人配置され、三十分ほどで湿地帯を過ぎ、幅十メートルの氷上を渡り、山に入る。

二人一組になり各組の間隔は五十メートルとして伐採を開始する（倒木による安全対策のため）。生まれ初めて作業なので全然進行しないから、たき火していると監視兵が無情にも足げりにして火を消し、グワイ、ラボータ（早く作業をしろ）とけしかける、このときばかりは、悔しさに涙を落とした。

やはり私たちはソ連の俘虜になったのだ。私たちの死活は彼らの意のままなのだと深く認識した。

監視兵は私たちより一足先輩の独ソ戦で俘虜になったルーマニア、ベッサラビア人で、彼らは帰国の残留した一員で、自分が早く帰国するためにも点をかせぐ。私たち二、三人が集まるとすぐ来て、グワイ、グワイと自動小銃（通称マンドリン弾薬七十二発入り）を突きつけておどかす。

入ソ以来一番最初に知ったロシア語である。帰り道、収容所の方向に真つ赤な死体を焼く炎が見えた。今日もまた仲間が死んだのかと重い足をひきずり、話し合いながら帰營する。

昭和二十二年二月二十日

厳寒と凍傷

日中でも太陽が悲しそうにほんやりとした光しか与えてくれない。この気温はマロース（零下）四十五度を超えるだろう。

たき火をしてもしばらくの間炎に手をかざさないと暖かみを感じられないほどの寒さ、というより痛さといったのが正しいと思う。手を見ると指先がろうそくのような乳白色をしている。ひどい凍傷だ。交互に指先を強くこすつても血の気は出てこない。こういうときに火にかざすのは絶対禁物で、雪で赤くなるまですること。監視兵がやって来て、自分の指を出して見せる、やはり凍傷のあとである。

伐採ノルマ

まきは二人一組で八立方メートル、長さ二メートルのものを高さ二・一メートル、長さ四メートルとし、建築用材は末口三十センチ以上、長さ六・五メートルとし本数は失念しました。

根本はなるべく地面に近く、切り口を入れ、倒した後は木の皮をはぐ、小枝は全部焼く。この順序で毎日

作業する。現場に早く到着して、まきにするか、用材にするかその組で決めるのだが、まきだと数が多くなるし、用材だと末口三十センチ以上の立木を見つけるのも容易でない。どちらも作業が終わらないと帰営できないので、初めは早く終わった組が応援していたが、現場がだんだん遠くなるので、応援する組は全くなくなってしまった。厳寒と重労働と栄養不足のためでしよう。

駅分所

ハラグリーン駅で、山から搬出され野積みされたまき及び建築用材の貨車積み作業で、順序として、冬期Ⅱ伐採、他の季節Ⅱトラック積み込み作業、駅での集積作業、貨車積み作業というサイクルで繰り返される。

運搬にはアメリカの援助物資で供与されたスチュードベーカー社の軍用トラックが主に使用され、威力を発揮した。

駅は吹きさらしだから山よりも平均して三、四度低い。十八トン、五十トン積みの有蓋車にまき、無蓋車には建築用材を積み込むのです。貨車が引込線に入っ

て出発までの一定時間に終わらなければ、他の列車ダイヤが狂い、事故故も予想される。貨車の責任者、収容所長等が職務怠慢「第五八条」国家反逆罪で処罰を受けるから、私たちをダワイ、ダワイと狂犬のようにけしかけろ。

一貨車の受持ちが、貨車数にもよるが、三十二人程度でした。時間に制約される重労働である。厳寒、重労働、栄養不足が原因で、あの低いレールをまたぐに足が上がらず、まして照明などなく真つ暗だからよくつまずいて倒れた。駅分所の積み込み作業のつらさに耐えかねて、佐藤という男が東方面行きの貨車で一人で逃亡した。しかし貨車で逃亡はとても無理とはわかっていたのだろうが、ナホトカからここまで千五百キロもあるから無謀だ。

大晦日なのに、ここん連では通用しないし、無関係だ。今日も五十車両連結の貨車が朝から二本も引込線に入っている。一本積み込み終わって宿舎の門に入ろうとしたら歩哨が、夜中の十一時ころまだ貨車が入るから現場で待機するようというところで、俘虜はつく

づくつらい思いをしました。

昭和二十三年元旦

前日の夜間作業でぐったり疲れて帰って来て、腹がペコペコだ。朝食を終わって、元旦ぐらいはゆっくり休めると思ったのも束の間、また貨車が入った、全員整列の鐘が鳴る。食延ばしの定量を蓄えたもので、心ばかりのご馳走が出る。民族の習慣の違いもあるだろうが、こんなみじめな正月なんて、と言いかけると「我々は俘虜じゃないか」と境遇を思い出した。

昭和二十三年

一月二十四日、帰国のためナホトカ第三八〇収容所第一分所に入り、その後道路補修作業延べ二百四十キロをしながら収容所を転々とする。

六月十五日、恵山丸に乗船ナホトカ港出帆、六月十八日、舞鶴に入港、無事に復員する。

最後に、抑留中、帰国を夢みつつ万斛の恨みをのんで倒れた同胞に対して、衷心より哀悼の意を表します。

シベリア抑留体験記

岩手県 長塚 力

終戦後、十月初旬の旧北満の都市チチハルは、すでに晩秋の気配色濃く、シベリアおろしが身にしてみる季節になっていました。ここチチハルの関東軍の被服庫より多くの軍服外衣服を取得して、日本に帰ることを信じて貨物列車（二段式）に乗り込みました。間もなく、列車が北進していることに気づき驟然となりましたが、満州及び朝鮮は戦後の政情不安により、ソ連經由にて帰国とのことでした。

久方ぶりに日本（郷里）や食べ物の話題でにぎやかでした。夜になって下車、集落は暗く寂しさを感じ、寒気厳しく、地面は雪で白くなっていました。ソ連への第一歩をここチタ地区のハタプラーク、北緯五十一度、東経百十五度、チタ市より東南約百五十キロの地に印したのです。以来、一九四八年八月に帰国するま